

令和五年度 中期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】説明的文章（論説）

〈出典と著者〉

文章Ⅰ

『今日の芸術』（岡本太郎）

『今日の芸術』は、岡本太郎による美術評論書。サブタイトルは「時代を創造するものは誰か」。一九五四年光文社より刊行、ベストセラーとなる。その後一時絶版になっていたが一九九九年に光文社より知恵の森文庫として復刊。創作者の実体験に基づきつつ、美術、歴史、民族学など広範な知識を駆使し、論理的に展開する岡本太郎の美術思想の分かる名著。

岡本太郎は、日本を代表する芸術家で、「芸術は爆発だ！」などのインパクトのある名言や、個性的なキャラクターが印象的とされる人物抽象美術運動やシュルレアリスム運動にも接触しており、「太陽の塔」などの奇抜な配色・形の絵画やオブジェを多く残している。

文章Ⅱ

『アート・ヒステリー』（大野左紀子）

民主主義の太陽が生んだ「自由」と「個性」を掲げる美術教育と、資本主義の雨もたらした増殖、拡大し続けるアートワールド、それらを通して、アートと私たちの関係を読み解く作品。「アート」の名の下にすべてが曖昧に受容される現在を、根底から見つめ、その欲望を洗いだしている。

大野左紀子は一九五九年、名古屋生まれ。

れ。東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。現在、名古屋芸術大学、トライデントデザイン専門学校非常勤講師。著書に『アーティスト症候群』『女』が邪魔をする』などがある。

問一 漢字の読み書き

漢字の学習は読み書きを基本として行っているが、それらに加えて、意味・使い方・（熟語の）構成にも意識を向けて学習しよう。試しに今回出題されている語句について全て確認して定着させる努力をしてみよう。

問二 文の成分（文節）と品詞の理解

文節は文の意味が通じる最小単位の言葉に区切ったもの。文法的に言えば、「自立語のみ」あるいは「自立語＋付属語」で構成された言葉である。まず、こういった文法用語（学習用語）の一つ一つの定義を正しく理解して定着させてほしい。区切る技術としては「ネ」を入れて意味が通じるかどうか確認するとよい。

右の定義に従えば、「だれにでも／理解できるとは／考えられて／いませんでした。」となるため、文節は四つと判断できる。

問三 因果関係の理解と「因」の要約

筆者は傍線部で「もどかしい」と主張しており、その対象が直前の「うかつでいる人が多い（こと）」となる。「うかつ」とはぼんやりして注意を向けていないこ

と。では傍線部を含む一文の理解に努めると、筆者は今日の芸術Ⅱ人々の生活自体Ⅱ生きがい、と考えているため、一般の人々がぼんやりしているからもどかしく感じていることが分かる。

また、一般の人々は何故そうなってしまうっているのか。右に関連する本文の範囲を参照すると、後段を要約すれば「見に付けた常識」などが固定観念となってしまう、人々を芸術から遠ざけてしまっていることが述べられていく。

さて右の読解の軌跡をたどり選択肢を判断すると、前半部分から関係のない話題が書かれるア・イが誤りであることは明白で、エは「現在の常識」、「他人事のように接して」とは本文の記述にはなく意味もズレているため誤り。これらの記述を正しく踏まえているものはウとなる。

問四 比喩表現と同義関係の理解

1 について、「垢」とはこびりついた汚れ、主にネガティブな内容で用いられることが多く、この表現からは問三で述べた「常識」などが私たちのものの見方をしばり芸術を遠ざけてしまうものを批判していることが分かる。ではこれと同義のものをこれより以前の記述とのつながりをたどり、またこれ以後のつながりをたどれば模範解答にある「目をひらく力」だけがポジティブな側面に注目した内容になっていることが分かる。

また、2は右の具体例を問うているので、昔からの文化や伝統となっており、

私たちにとっては「常識」となっているものと同じ性質の情報を整理すると、「近所付き合い」が関係ないことも分かる。

問五 活用のある語の理解

「結構だ」は「よく出来上がっている」の意味をもち(自立語で)、「結構だろ(う)」「と活用し(かたちが変化し)、物事の状態や性質を表し、「だ」(や「です」)で終わっていることから形容動詞であることが分かる。ここでは問二でも指摘した文節と文の成分の関係ではなく、単語と品詞のそれぞれの定義の理解と定着、識別ができるようになってくるかを問うている。問二と合わせて一つ一つ丁寧に復習してほしい。

(活用形)についてはそれぞれの活用形の意味を理解し、識別の練習を重ねておきたい。今回は「結構だ」の後には引用の「と」があるため、終止形が相応しい。

問六 要旨の理解

本文は問三、四で読解した要点に基づき、最後は筆者の結論的主張が述べられている。傍線部分を含む一文ではまず問四で述べた「不要な垢」を取り除くことが先決と述べているため、選択肢アの前半は正しく、続く後半も本文の続きと合致する。また筆者の考えは末尾だけでなく、問三でみてきた部分にも含まれるため、関係する箇所を広く見渡し、主張を整理していけばエを除いた選択肢は正しいことが分かる。

問七 一文内の語と語の関係、一文と一文、段落と段落の関係

理解の難しい文や文章は意識的に分析し、論理(つながり)を考えて再構築しながら読み進める必要がある。ここではその最小単位として **B** で一文内の論理、そして **A** で文と文、さらには段落間の論理が意識できているかを問われている。今回の出題は接続語(接続詞)の理解も含めた問いになっているが、それがなくとも常に主体的且つ意識的に論理を意識していくことが大切である。

A を含む一文と続く一文はピカソが自由や個性的アーティストの象徴であることを述べていることを理解し、「ピカソも」の「も」にも注意しておく。次に前の一文や二つ前までの段落の内容をみると、絵に自由に向き合う立場について語られているため、前後のつながりは全く同じ「同義」ではないが、絵に自由に向き合う人の立場からはピカソⅡ「自由」のシンボルと考えることが分かり、「順接」の関係が正しいと分かる。

B を含む一文を確認すると、後ろが「芸術文化」、前が「文化」、その「文化」になるものがアート、さらにその前の一文でアート(オリジナル)が加工品(Ⅱ文化)と述べられている。似ているものが並んでいることを示す、並列や選択の意味をもつ「あるいは」が入る。

問八 複数資料間の情報の整理(同義)

文章Ⅰはこれまでの問いでもみてきたように、岡本太郎の芸術への姿勢、つ

まり先入観を排して自分の問題として直接芸術に触れていく必要性を述べていた。また、文章Ⅱではピカソへの評価が分かれた背景を説明しながら、その影響を受けた岡本太郎に対する評価もまた同様であったが、それらが次第に受容され評価されようとしていることを述べていた。ではその岡本太郎が何故評価されていたのか、それは文章Ⅰの中で述べられている岡本の考えの中に見える「芸術」に対する一般の人々の姿勢が関わっていたと考えることができる。ではその岡本の姿勢と言えば、先にも確認してきた通り、問六で確認してきた内容を踏まえ、条件を満たす記述は「生活自体」となる。

問九 複数資料間の情報の整理(対義)

問八の解説を踏まえると二つの資料、人物の主張は前者が芸術への態度を改める積極的な姿勢を打ち出しているが、後者は前者と異なり、次第に受容されていくものだと述べ、前者に比べ積極的な姿勢はみられないためアが正解。

残りの選択肢はイが全く本文に書かれておらず、ウは「現代人の生き方を批判」する目的がずれている、エは後半の「芸術の多様な側面」を伝えていないので誤り。

【二】小説(文学的文章)

〈出典〉『若い詩人の肖像』

一九五六年に発表された、青年期の伊藤自身についてつづった自伝的小説。発表した複数の短編小説を、のちに長編小

説としてまとめたもの。作中で描かれるのは、伊藤が故郷の小樽で過ごした学生時代から、文学への関心を抱き始め、詩人として名を成そうと上京を決意するまでの物語。

〈著者〉伊藤整

一九〇五—一九六九年。詩人・小説家・評論家。北海道生まれ。本名は整ひとし。東京商大中退。詩から小説に転じ、昭和初期に「新心理主義」を唱え「得能物語」などを書く。戦後は創作と文学理論の統一をめざし活躍。小説「鳴海仙吉」「氾濫」、評論「日本文壇史」など。

問一 本文中での語彙の用いられ方

a・bともに、まずは辞書的意味を確認してほしい。その際、漢字の読み書きや、何故その意味になるのか構造や背景まで気にして学習していこう。その後、とりわけ複数の意味をもった語などでは、本文中ではどのような意味で用いられているか論理的に検討する必要がある。選択肢内の言い換え表現まで含めて、語彙は絶え間なく関連づけを行いつつ学んでほしい。

問二 心情の根拠（因果関係）の理解

ほっとした気持ちの前後の情報を確認する。前半は「そう」感じてこの気持ちになっっているため、「そう」の内容である苺クリームがこの日の散歩のさわやかな気持ちに合っているという内容になっている。後半は前半に比べ「明るい感じが損

われずに終わったことを喜んで」いるので直接的な理由になっていることが分かり、以後は梶井とのやりとりにつながっているのでここまでが参照範囲。正解はウとなる。

残りの選択肢は全く内容にそぐわないものになっているが、情報としては本文にみえるものばかりのため、その照応作業だけで解答したり、或いは思い込みによつて解答してはならないため注意せよ。

問三 文学史の知識

ここでは日本文化のうち、文学の歴史に関わる理解と知識の定着をみている。文学史は、①歴史的時代背景、②筆者の生涯、③筆者の作品の特徴や変遷、④作者と他の作者の関係や世間の評価、作品の掲載雑誌、⑤名前・時代・作品の基本情報をおさえて定着させていきたい。

高等学校からは「文学」を本格的に学問として学習する。その入口に立つ準備意識として意識するだけでなく、実際に作品に触れる契機としてほしい。

問四 場面展開における心情理解

ここでの中盤にあたる梶井が「私」に志賀の小説の魅力を伝え、読書を進める場面である。この時「私」は読んだことのない旨を伝えるが、書き手（語り手）はその心中を描写している。「私」が詩人であり小説との付き合い方が部分的であったことや、谷崎や志賀、武者小路のような小説家の作品への芳しくない評価が描写されていくが、これを後半の梶井の発言

の真意と比較すれば、この考えが偏りがあるものと判断できる。この点は同様に発言直後に、自分が好んだ詩を書き写す経験をもとに梶井の質問意図を「作家の良さを自分が認めて」と考えている点からも分かるので、アが正解。残りの選択肢は前問で補足した通り、本文に記述情報はみえるが、意味内容が全くそぐわない。

問五 心情の背景理解

A や B は問四でもふれた「私」の考えの背景になつている心情部分に関する問いである。A 〓「それ」〓「他人のものを書き写すことはしないぞ」とあるため、これに対して否定的な姿勢を示す内容が当てはまりそうだ。これに対し B 〓「オレの鑑賞眼に及第したものを取ってやるのだ」とあるため、積極的な姿勢がうかがえるため反対の内容が当てはまりそうだ。ではこれらの関係に当てはまる内容といえは、「それとは違ふと分かった」以下の内容にみえる「屈辱」と「誇り」だということが分かる。

問六 小説の主題

問五までにみてきた「私」の梶井の問いかけにまつわる小説への考えは、本文の末尾にみえる梶井の発言の真意を理解したことによって変化している。梶井が志賀の作品を書き写したのは、書くことの技術の中にある筆者の息づかいを理解するためであり、「私」はそこに梶井の書くことそのものの実質を捉えようとする

真剣さを感じとる。そんな姿勢をもった梶井の薦める志賀の作品や小説は信用できるものなのかもしれないと考えるに至っている。よってアが正解となり、残りの選択肢が全く当てはまらない。

問七 登場人物の人物像

作品の登場人物は問六の主題に気づくための仕掛けやその他の意図をもって創作されている。今回の小説は自伝的小説ということもあり、伊藤整が小説を書いている時点からかつての自分を振り返った時のエピソードや気づきを中心に据えるためにあえて当時のとがっていた若い自分を造型描写している。本文の中盤から後半の気付きに至る部分の描写を適切に踏まえた人物像の説明はイが正解。残りの選択肢は全く当てはまらない。

問八 表現の特徴や工夫の意図、効果

選択肢アは本文の前半部分、梶井との散歩と苺クリームとのくだりを詩的、小説的（文学的）タッチで描いているため正しい。イも中盤から後半にかけて会話が限定的になっていき、それに対して内面描写が増えていることに注目すれば正しいことが分かる。これと全く逆の理解を述べているウの「熟考するようす」「歓談の深まり」などは分からないため不適。エは前半から中盤にかけては分かりづらいが「梶井の言った言葉の後半分を聞いたときから」など、後半の描写は明らかに当時の状況を後になって振り返って書いていることが分かるため正解といえる。

【三】古典(古文と参照資料の読解)
〈出典〉『大和物語』(一五八段)

当時の貴族社会の和歌を中心とした歌物語で、平安時代前期『伊勢物語』の成立後、天曆五年(九五一年)頃までに執筆されたと推定されている。登場する人物たちの名称は実名、官名、女房名であり、具体的にある固定の人物を指していることが多い。前半は歌を核として、皇族貴族たちがその由来を語る歌語りであり、後半は、悲恋や離別、再会など人の出会いと歌を通した古い民間伝説が語られており、説話的要素の強い内容となる。

問一 歴史的仮名遣いと現代仮名遣い
表題の規則をまとめると左のようになる。

語頭を除く「は・ひ・ふ・へ・ほ」

↓「わ・い・う・え・お」

例…あはれ↓あわれ

「ゐ」・「ゑ」・「を」・「む」

↓「い・え・お・ん」

例…あなか↓いなか

「ぢ・づ」↓「じ・ず」

例…はづかし↓はずかし

「くわ」↓「か」、「ぐわ」↓「が」

例…くわし↓かし

「—au」↓「—ou」

例…まうす↓もうす

「—ni」↓「—nyu」

例…あやしう↓あやしゅう

「—eu」↓「—you」

例…けふ↓きょう

以上の規則を踏まえ、試験(練習)問題

等で確認することも大切だが、平素より「読む」際に意識してほしい。

問二 主体(主語)の把握と展開の理解
本文の登場人物は主に三人、男と二人の「女」、「(もとの)妻」と「今の妻」の関係と話題の展開を意識しながら読み進める技術態度が備わっているかを問うている。Aの女は冒頭より大和の国の夫婦(男女)のもとに、男が得て(連れて)きた「女」(今の妻)を指している。次にAの女と三人での同居生活が始まった後、壁を隔てた生活の中で「わ(我、吾)」が方への訪れがなくなったことを「憂し」と思っているBの人物にあたるのは「(もとの)妻」だと分かる。そんなある日、秋の夜長に鹿の鳴き声を聞いた男が壁を隔てているCに問いかけた後、返歌が素晴らしく感動してD「今の妻」を家から出していることが分かるので、Cは「(もとの)妻」ということが分かる。
C、Dが難しいと思うが、まずは粘り強く古文の前半(冒頭)の人物関係や場面状況の理解に努めよう。

問三 古文の解釈(因果関係)

「憂し」は現代語の意味(漢字の理解)から「つらい」の意味が推測でき、その主体は前問で「(もとの)妻」であることが分かっている。彼女にとってつらいことにあたる情報を整理していくと、まず冒頭にある「長年連れ添ってきた」記述を参考にし、それにも関わらず新に妻を設けたことを考えることができる。気をつ

けたいことは、現在の常識と異なり、当時は一夫多妻制は通例であったため、単に別の女性と結婚することは「憂し」とはならないことは様々な古典作品の記述からも明らかである。ここでは「長年連れ添ってきた」↓「にも関わらず」の理解が大切。

他には「妻問(い)婚」(男が女の許を訪れて結ばれる形態)も現在の常識と異なるところではあるが、ここでは同じ家に別の女性を住まわせることは珍しいことである点、またもとの妻との生活空間に壁を設けたり、そちらへの訪れがないことはつらかったと想定できる。イのみが全く異なる記述となっている。

問四 和歌の解釈

単独で和歌を解釈するだけでなく、今回のように地の文と和歌のつながりを考えて解釈をする、或いは既有知識や資料を含めて解釈を進めるべく、必要な知識や技能、態度を身につけてほしい。今回は1〜4の小問への取組プロセスを通じ、これらをヒントとして解釈に取り組む。

本題に入る前にまず、地の文同様、現代語や既有知識をもとに現代語への翻訳を予測してみる。語注を踏まえると、「私もそのように(?)ないて(?)人に恋われた今はよそで声を聞け(?)」のように考えるだろう。次に前後のつながりを考え、語順を入れ替えてみたり、省略されている語を推測(↓論証)しながら読む態度は現代語文でも同様である。しかし、これだけでは解釈に無理があるので以下

の知識や技術、態度が必要になる。

1は表現技法(修辞法)の理解を問うている。ここでは「しか」に「そう」の意味とここまでの地の文にみえる「鹿」の意味がかけられているため、「掛詞」が適切。ちなみに続く「なき」も定義に従えば鹿が「鳴」していることと、人が「泣」く、または「声をあげる」ことがかかっているとする説(立場)もあるがここでは割愛する。このように表現技法(修辞法)の定義を理解、定着、活用することで解釈を深める練習をしたい。

2〜4は1と【資料】を踏まえ、「そう」⇨鹿のように鳴く内容について考え、後半に続く内容を理解していく。【資料】では秋になると鹿が繁殖シーズンを迎え、オスがメスを呼ぶ姿に男性が女性を恋い慕う姿を重ね合わせていた和歌が紹介されている。ここで2について考える必要がある。和歌の下の句、「今こそ」に注目すると、係り結びの法則により、文末の結びの語「聞け」は命令形でなく、已然形になっていることが分かり、本文展開を踏まえると、「今となっては他の女性を慕う男の声を、壁を隔てた他所の場所で聞いている」という解釈が導け、上の句は「かつて」の内容だと分かる。これらを踏まえると上の句の内容、3はアが正解で、下の句の内容、4はウが正解だと分かり、それぞれの残りの選択肢の説明は全てズレていることが分かる。【資料】にもあるように、かつて自然と人間、その営みの結果である文化がつながっていたことを学び、改めて自然が、そして文化

が人生に意味を彩りを与えてくれているものだということに気づき、価値を見なおしてもらいたいと感じる。古典を学ぶ意義の一つは、現代的な課題とその解決に向けての目標、SDGSの考えにもつながるものではないだろうか。

問五 要旨の理解

(もとの)妻の読んだ歌を受け、「限りなく愛で」たため、歌の内容が男の心うつ素晴らしいものであったと考えられる。ではその歌を詠むまでのいきさつや、和歌の読みぶりやその内容を踏まえながらその素晴らしさについて考えていく。

まず場面は秋の夜長、夜の時間帯は古来(現在も)感性が鋭敏になりやすく、またその時間も長い。それはネガティブなものだけでなく、時には昔を偲(しの)ぶ充実した時間にもなったであろう。ここでは折しも鹿の鳴く声の聞こえる時であり、昔の夫婦仲のことも思い出したのか、とにかくその情趣を壁を隔てた妻に求めていく。歌はその経緯を全て踏まえて読まれていたため、男の気持ちを理解していると判断でき、素晴らしさの一つといえよう。

また右とそれに応じた自分の感慨を三十一音に込めて返す工夫や技量も必要となるわけだが、(もとの)妻は見事に内容と状況に応じた言葉の選定、掛詞や対比、係り結び等の修辭を駆使し、辛さに耐え忍ぶ気持ちや、夫への想いが詠みかける。夫の愛が自分に戻ることを期待しているからこそ、離縁せずこうして共に暮らし

歌を返しているとも考えられ、こうした女の心に男ははっと気づかされたのである。こうした点からエが正解となり、残る選択肢はどれも内容として不適切となる。

【現代語訳】

大和の国(現在の奈良県辺り)に、男と女が住んでいた。長年(お互いを)とても大切に想い暮らしていたが、どういうわけか(男が)(別の)女と結婚した。これまでのままではいられなくなり、(男は)(この新しい女を)(これまででもとの女と暮らしていた)家に連れてきて、壁を(つくって)さえぎり、もとの女の方へは全く寄らず、(もとの女は)とても辛く思っていたが、全くねたみを言うことはなかった。

秋の夜長に、目を覚まして聞くと、鹿が鳴いている。それを何も言わずに聞いていた。壁の向こうの男が、「鹿の声を」聞いていますか、西の人」と言ったので、(もとの妻は)「どうしましたか」と答えたところ、(男が)「この鹿の鳴く声を聞きましたか」と言ったので、(もとの女は)「はい聞きました」と返事をした。男は、「ではそれをどう聞いていましたか」と言ったので、(もとの)女がふと返事をした。

私も秋に雄鹿が雌鹿を恋い慕って鳴くように、かつて貴方に恋われたこともありました。今となっては壁を隔てた他所で別の女性を恋い慕うお声を聞いているばかりです。

と(もとの妻が)詠んだので、(男は)(もとの妻を)とても愛しく思い、この新しい妻を送り返して、元のように(仲睦まじく)暮らし続けたということだ。